返事ばかりして、一寸は出てこないことも、一度や、二度のことぢやあ無い、それで出て來ると何うだ、何だかばたくさして、今帶を占めて起ちましたといふ樣子も見えたぢやあないか、疑つて見りや緣の下へ、二歲の下駄を忍ばしてあるつていつたつて、爭はれやしないぢやあないか。其時分は別に疑ひもせなんだが、今になつて見りや、いづれ目のつけ處だ。)つてそんなこともいつたさうなり、そりや、眞個覺があるのよ。蜘蛛がね、頸から這込んだことがあつて、晩方さ。」

四

「單衣もので身輕ぢやあつたし、むず〳〵するから吃驚して、もう氣でも違ひさうになつて、帶を解いて、引拂つてた處へ、ちやうどあの鳥井が、其の、御免なさい一件でね。だもんだから、あわてて、そんな風を見られたんだらうと考へるわ。それからまださ、此間、お前さん、鳥井の內へ行つた時、白銅の入つてた蝦蟆口を忘れて出たとね、ねえ、作ちやん。」

「あゝ。」といつた作は、其まゝでものも得いはないで居たのであるが、唯一言應じたばかりで、續いては言はないでぢつと沈んで居る。

「そして何だつていふぢやありませんか。途中で引返して取りに戻つたつて、ね、左樣でせう。」

と念を入れて、

「お前樣は何の氣も着かないんだけれど、まあ、人の惡い。其をね、まだお前さんの手に返さないさきに、そつと中を見た人があると、作さん、然うお思ひ！　鳥井の細君さ。角ね、あの、それ私が舊大變に世話をして、まあ、大分恩に被せても可い、あの角が、私の手から知己づくで、丁ど鳥井の細君がぶら〳〵してるからつていふので、世話をして、女中代といふやうな譯でやつてあるがね、其が、まあ、最初見つけ出したんだつて、

(あら、誰方んだか、財布が)つて拾つたら、お見せ、といふので、細君が取つて、角と二人であけて見たつてね。二十錢ばかり入つて居たとね。お前さんは何んなに困つて居なすつても、月に一度づゝは少なくつても鄕里へ手紙を出すんだつて、何にもつかはないで持つてるでせう、そんな心掛で居なさるもの、如何困つたつて、私は一錢でも借りようとはしないで居たわ。良人はちつとも知らないお金子さ。お金子だつて何二十錢ぽつち。だけどもね、お恥かしいけれど此頃ぢやあ、ちよいと湯錢にだつて困つてますわ。

其を鳥井ぢやあ知つてるから、(おや！　三澤さんに居る作さんのだが、何うしてこんなにお小遣をば持つてるだらう。)つて、鳥井のかみさんが然ういつたとね。

(分つてます、そりやあのお松さんが持たせて置くのでせう。旦那は道樂のあとで、あんなに困

つてますけれど、お松さんは實家が可いのだから、彼でも母親の處から内證で幾干かづゝ月々不自由はしない位にして送つて來ますが、一體馴染添で、お松さんの親御達は今の旦那と一所に居るのが大の不得心なんで、綱でも帶に結へとかうといふのを、振切つて逃げて來て、東京であんなことをしてるのですから、おもて向はかまひつけないやうにしてありますが、人情ですもの。困るといや、もと〳〵ありあまる身代ですから、そんなにしちやあ、そつと附屆けがありますので、はじめの内はそのお金子を出しちやあ、旦那の喜ぶのを見て御自分でも喜んで居なすつたんですが、あゝ、やつて、他に可愛いのが出來ちやあ何うして其を出すもんですか。そツと祕しといて、まあ、それ作さんの小遣にもしたり、衣服だつて、拵へて、祕して、髪結處に預けてあります。内に居ちやあ、わざつと束ねがみか、なんかで、くすぶつて居て、一寸々々出掛けちやあ、それ、髪を結つて、其處で一枚りうと仕立つて、用意の可さといつたら、新しい、吾妻下駄まで調へてあつて、ずつと拵へて出ると、作さんを路地裏か何かへまはして、ばつたりといふ誂になつて居ます。で何處へかお入といふ寸法でせう。

角は、あのお松さんには小い時から大變お世話になつて、お主とも、姉さんとも思つてましたけれど、も、そんな心掛の方は愛想が盡きました。今ぢやあ御昨今だけれど、旦那樣の方がおいとしい、二歳も二歳だ、小生意氣な。)つてさういつたとさ。作さん、口惜いぢやあないか、阿魔、

しどいから。」といつた聲は鋭かつた。

五

「作さん心配をしないでも可いよ、まあ、しかし聞いて下さい。

それでさ、お前さんは何にも氣がつかないでおいでだらうけれど、蝦蟆口を取りに歸つて、向うで、渡す時、

(大分工面が可いね、おおごんなさい。)てつて、さういつて、皆がニタ〳〵したでせう。む、さうだつて、皆其氣で、後指を指したんさ。丁ど鳥井も居たらうね、あゝ、さうだらうね。

それでね、角がそんなことをいつたつてことも、矢張鳥井が十八ケ條の中に入れて、良人のに談したんだつて、けふ、さつき良人が私に突かゝつた時然ういつたんだよ。

何でもねえ、此間から、鳥井が來ちやあ、良人を一寸々々引張り出して、お前さんと私とがさしむかひになるやうに留守さしちや、何處かへ出て行くのを、大方工面にでも出懸けるのだらうとばかし思つてたが、さうぢやあ無かつたの。

(昨夜、再昨の晩と二晩續けて、何處も何だから天麩羅屋へ上らうぢやあなし、明神樣の中を行つたり、來たり、石燈籠の間だの、唐獅子の前後を、ぐる〳〵廻つて。)だつて、立つてちや寒い

わ。」

松は幽に笑つた。

「ねえ、御苦勞樣ぢやあないか。鳥井がしみ〴〵親身になつて、あの、何だつけね、意見でもなし、諫めるのでなし、愚癡でもなく、朋友づくでそれ、あゝ、然う、其忠告とやらをしたんだつて。

さつきも良人がいふのにや、

（何、そりや、我だつて道樂もしたものだ。詰らないじんすけなんぞいふ氣はないが、それぢや、手前あんまりな仕方ぢやあないか。下女風情のお角にまで、あの方は可哀相だ、な、下女に可哀相だといはれるやうぢやあ、我だつて默つちやあ居られない、自分は大ざつぱで、呉れてやるを極めるにしたつて、極をつけないぢや、鳥井にだつて、顏が合されない。）

つて然ういふぢやあないか、串戲にして笑つて居られるやうな劍幕ぢやないんだもの。

（いゝえ、そんなことを言はれちや、あかしを立てるより、言譯をするより、まあ、私の方で、默つてばかり居られません。濟されやしないから、そんな、そんなことをいつた鳥井と、お角とを並べて下さい。お前さんの前で立派にいふことをいひますから。）

然ういふとね。

（松、あまり大な口を利かない方が可い、そりや鳥井にも立會つてもらはう。お角も引張つて來るが、覺があることなら大びらにしないが可からう。我もまさかとは思つたけれど、まんざら形のないことぢやあるまい。）つて嫌な顏をしていつたんだがね。

今にして思へば、鳥井に然る嫌なことをいはれたので、良人もくさ〴〵して堪らなかつたからであらう、知らないさきは何にも氣が着かなかつた。

昨夜は餘所から歸りがけに、珍しく酒屋のご用を摑んで入つた。舊から酒呑ではあるけれど、多日窮迫のために餘儀なくされて居たので、其かはり羽織は脫いで來た。松はけふ此頃の場合だのに、と然う思つたので、あまり可い顏はしないで居ると、獨で燗をして、默つてじろ〴〵顏を見て居たが、猪口を取つて獨酌の構で、キツと眼をつける。松は長火鉢の向うに手を翳して、あたるでもなく、兩手をもいだやうに懷つて、ふるへさうに寒がつて居た。

（餘所の內ぢやあな、こんな時にや酌をしてくれるんだよ、）と淋しく笑つて、ものを含むやうに良人はいつた。

（だから、餘所へ行つてお酌しておもらひなさいな。おゝ寒。）といつて横になつて、一度入つて居たのを、起きて出迎へた、傍の夜具の中へころげ込むやうになつて、くるりと背後を向いてし

まつたのである。

六

良人は流眄にかけてぢつと見たが、ぐつと手酌で引懸けて、隣の室にこれを見ながら、煎餅蒲團にくるまつて居た、作を見返つて、

（女房にまでかうされりや、君なら何うする處だね。）

と何の事もなげに、十ばかり年紀上の男に笑ひながら聞かれたので、作は別にいふこともなかつたから、唯莞爾した。

この莞爾も、良人の目には何んなだつたらう。

却説、お松のいふには——

「だからね、そりやをかしいと思つたらうさ。ねえ作さん。だけども私等に何かさういふ氣があつたんぢやあなし、まつたく心持よく醉はせてやらなかつたのは惡かつたけれど、そりや良人だつて、些少は察して呉れるが可い。

こんなしがない中で羽織をなくしてまで飲むのかと思や、わけは知らないもの、誰だつて可い心持はしまいぢやないかね。

それも高砂、野の宮で、萬事お媒妁まかせの、よろしく遊ばしませでもつて、お嫁入となつたわけぢやあなし、何でも知り切つてて、はじめて逢つた晩、夜中に目を覺して、

（あゝ、うと〳〵して可い夢を見た。）つていふから、（もし、何んなのを見たの。）と此方は未だ恥かしくつて尋常さ。

（奴のよ、おいらんの夢をよ、）といつて、平氣で居た人ぢやないの。いまめかしい、いたづらも何もあるもんかね。

でもさ、疑はれちやあ、そりや、まつたくだ。良人も顏は立つまいし、私だつて默つちやあ居られないから、何でも、何でも可いから、鳥井とお角に、お前さんの前であひませうつて、然ういつたもんだから、（それぢや、まあ、ともかくもモ一度話して來よう。最も其のむかうぢや、お松さんの前で立派にいつて見せる。殊に因りや證人もあるといふことだから、其つもりでね、お前、後悔をしないやうに。）と私にいつて出て行つたんだから、もう歸つて來るだらう。證人だつて、お角に違ひないやね。畜生、もし然うなら飼犬に手をかまれるてえんだ。たゞは置かないから。作さん、あのう、お前さんは、些少もお案じぢやあないよ。」と、松があとの言は、大に穩かになつて、却て、自分が人を慰めるやうな語氣であつた。

「えゝ、もう笑ごとです、些少何かと思ひましたが、詰らない。しかし餘り意外ぢやあありませ

んか。」
「意外も、案外も……お！　そりやあ、さうと。」
と、かういつた時、二人は目を合せたが、齊しく四の眼で天井を仰いだ。眞闇である。
「松さん、燈明を。」
「左様ね。」
「闇くつてこんなにして、居ちや。」
「何うせ何だと思つたけれど。」
「また疑られるたねでせうから。」
「いやなこつた。」
といひ合せたやうに、二人は手さぐりで身を起した。一人は洋燈を、一人は早附木を、と齊しく立つて分れたトダンに、突外すやうなけたゝましさ！　格子戸をあけてばた〳〵と駈け込む音。暗がりだから、ぎよつとして、思はず片隅へ身を竦める、
「御新姐様々々。」と息せいてあわたゞしい、女の聲。
「お角!?」と震へ聲で松は鋭くいつた。
「あ、あれ、御新姐様、眞暗ですね。」

「眞闇も何もあるか、畜生、汝は、汝は何だつて、畜生。」と、激した口は思ふことのいかばかりをも言ひ得ない、聞くと早やバツタリ其處へひれ伏した氣勢で、
「えゝえゝ、畜生、獣でも、鬼でも、人でなしでも、私、私は何でも可うございますから、鬼でも、蛇でも、畜生でも、何にでもなりますから、可うございますから、御新姐様、可うございますから、御恩は忘れやしませんから、何でも可うございますから早くお遁げ遊ばせ。大、大、大變でございます。とも角もお遁げなすつて、向うぢや、大騒ぎをやつて今に參ります。もう來ますよ。旦那も鳥井も飛んだことを仕出來しますから、御新姐様けんのんでございます。作さんもお少い方、何だつて構ひません、あとでまた何うともなるのでございませうから、あれ、もう斯ういつてます内に參りますと下可ません、私をお怨み遊ばしても可うございます、私は何うでも構ひません。」
「角！　お角！」と松はおろ〳〵聲になつて來た。淺からぬ縁のある角がいふことなんだもの。
「あれさ、早く、旦那はのぼせたんですから何んなことしようも知れません。後生ですから早くお遁げなすつて下さい。あれさ早く。」と、これもおろ〳〵聲である。暗まぎれをとつばくさと、人の立迷ふけはひがしたが、勝手の戸が、かたりと開いて、夢中で路地口を明神坂の方へ出て去つた二人の跫音がした。

二月ばかり經つて、松と作との潛んで居る所在が知れた。仔細も又殘らず知れた。

といふのは松の世話で、角は鳥井の細君といふのに使はれることになつたのであるが、この鳥井の細君といふのがむづかしい、嫉妬深い、だんまり坊で、口輕な角は、始終其傍に置かれながら、多くしやべることの出來ない苦しまぎれに、何か、何かと心懸けて、氣に入らうと勤めて居る内、詰らぬ所へ怜悧なもんだから、いつも、うつくしい、きれいだ、惜いものだ、あんなのはまたとあるまいと、鳥井が口癖のやうにいつて聞かす松を、惡口することが、其細君には何より喜ばれることを發見したので、遂には口ばかりでは濟まなくなつた。で、事が起ると、辻褄が合はなくなり、角は證人に立たねばならない、立てば實情を發見されて、何んな目に合はうやらと、苦しまぎれに、先を取つて、威しつけて、うつくしい女と、優しい男とを犧牲にしたのであつた。が、これが知れて、また二人の潔白だつたのが知れた時分になると、ほんとに男女とも……

玄武朱雀

一

「開けねえか〳〵、やい、唐變木、狸穴の次郎さんだい。かう、誰だと思つてやあがる。」

蔀に立ちはだかつて、喚くのは、職人體の壯佼で、自ら名告つた狸穴の次郎さんと言ふのである。

「やい、新宿へ交際ふのが嫌だからつて、人の手に喰ひつくといふ奴があるかい、痛えぞ、畜生、何うしてくれるんだ、やい。」

戸の内は寂りして、返事もしないで靜まつて居る。取合はないから戸外の壯佼は張合がなくなつたか、默つて醉眼をとろりと睜つた。小路の前後を眄したが、其目を返して半被の左の袖をかぐつて、二の腕の處をぢつと見た。

漲るやうに血の通ふ、筋の張つた二の腕に、文久錢ほど血がにじんで、輪取つて腫れたやうに成つて居た。

眉を顰めたが、其の手を袖の中へ納れて、長く露はした右の手の、握拳でどん〳〵と蔀を打つて、

「見ろ、こん畜生、血が出るぜえ、串戲ぢやあ無え、何だつて人の手なんぞに喰ひつくんだ！かう、石塊で打缺いたンかな、蔦口を叩き込みやあがつたんなら料簡してやらあ。人をつけ、馬糞ッ齒で、わんぐりやられた奴を袖ン中へしまつて歸られるかい。やい、合點ならねえ、唐變木、出て來て何うかしろい、出て來ねえか。やい、」

「騷々しいぢやあないか。何うしたんだよ。」といひながら、棟割長屋の一ならびに寢靜まつた中の、一枚破の入つた板戸を開けて、鐵のやうな冷い戸外へ、寢衣の上へ半纏を引懸けた、つッかけ下駄で櫛卷の天窓を出したのは、隣家の車夫が女房である。

「靜におしよ、誰だ、次郎さんだね。」

ずつと出て、懷手のまゝ聲をかけてひつたり寄る。

無性に戸をたゝいてた壯佼は、向直つて瞳を据ゑて、

「何でえ。」

「あら、何だぢやあないやね、お前、町内が割れるやうぢやあないか、何うしたと言ふんだね。」

「餘計なお世話だ、汝、三吉が女房だらう。」

「あゝ、御念にやあ及ばないよ。」とうつくしい染めた齒で莞爾する。

壯佼はつッかゝつて、
「だから話せねえッてんだ。打棄ッとけえ、入らざるこッた。へい、嫣々のある野郎だの、亭主のある女子に我のいふ理窟が分るかい。次郎さんが相手にやあしねえや、引込んでろ。」
くるりと背向いてまた拳をぶつける——どん、どん、どん、どん。
「開けろ、やい、唐變木、こん畜生、齒くそだらけの嫣々なんか大事にしやがつて窘むでら。我が奴あ鹽磨きだぜえ、湯錢が上つたつて、盥で濟ましとくやうな吝なんぢやあねえ、なあ、女房さん。」
と云つてまた見返つた。壯佼は掌で頰邊を撫でて見せて、
「え、おい、これが分らねえやうぢやあ、お前なんぞも、盥の部だ。」
「餘計なお世話だ。」
「へむ、顏でも洗へだ。」
「お前は醉つてるんだよ。可いから騷々しくつて仕樣がありはしないから、どん〳〵やるなあよしておくれ。何だつてまた野郎が戸をたゝいてる位氣の利かないッたらありやしない。翌日にでもなつたら出直して來るさ、ね、左樣ぢやあないか、見ッともないや、ねえ、お前。」
と氣が強いのだから女房は欠伸まじりに無遠慮にいつて退ける。と默つて聞いて居たが、思ひ

の外で、食つてかゝらうともせず。
ひどく落着いたものいひで、
「いや、分りました。」と、目が覺めたやうに言つて頷いたが、其まゝ身を返して戸口を離れた。

二

「何をいつてやんだい、默つてりや、何だ、齒くそだらけ。」
と湧上がつたやうに吼り立つて、ばた〳〵と人の立つた氣勢。
「可いからさ、まあ、あれさ、およしつてばねえ、」とおろ〳〵したうら少い女の聲、二三度あせりあつて、引摺られるやうな物音がする。爾時むかうの辻の角まで立去る壯佼を見送つてた彼の車夫の女房が、板戸へぴつたりと兩手を縋つて、
「源さん、うつちやつてお置きなさい。もう去つちまつたよ。居やしないから。」
「女房さん難有うございました。ねえ、まあ、お前さん、ぢつとしておいでよ、可いから、いえね、つい、良人も醉つてたもんですから。」と戸の内で返事をして、若い聲は立つて出さうにする。
「まあ、お休みなさい。」とおもてから取押へるやうにいつた。
「唯今開けますから、」

「いえ、またあしたの事にしませう、左様ならお休みなさい。」
いひすてて女房は身を退いた。其時内なるが近寄つて、直ぐ蔀の際で、
「何うも濟みません。」
女房はハヤ自分の家の戸口に居て、これには答へないで、身ぶるひした。
「おゝ、寒。」
半纏の袖を引重ねて、束髪の白い顔で、ちよいと振返つて空を見て、
「清ちやん、良月よ。」
といつたが、土間へ嵌まつたやうに其後姿は隱れて、手は見えないで、がたりと戸が閉る。
長屋は六軒の棟割で、隙間だらけの羽目、蔀で一ならび。これが古びて黑くなつて居るのに、揃つて板屋根が新らしいので、薄く雪を被つたやうに月あかりで眞白である。
皆平屋で奥が淺く、廂が矮い。此六軒の長屋のはづれに新粉細工の影法師のやうな、ぼやけた枝の、梢の鈍な、幹の高い、桐の樹が一本葉の落盡したのが、磨ぎ出した星のキラ〳〵とする中に空高く立つて居る。梢のあたりに硝子窓が見える、二階家で。瓦屋根の背後は、判然した黑い森。一輪の寒月は、恰ど其上に蒼ずんだ色で冴えて居るので、北から東へ弓形に麻布の一方を貫いた、其の小路の見渡す果に、月と摺れ〴〵に靄が掛つて、鏡の中の繪である如く澄渡つた此長

屋のあたり。屋根、軒端、道の上、斜に傾いた電信の柱、其線にまでも、音はしないで、犇々と霜が下りる、森とした夜は一時であらう。
小刻の跫音輕く、頰被をした二人の身體、町の片側に肩と肩とくツつきあひ、手首を引込めた袖口で、三味線の柄を眞直に脇下に搔込んで、男の方も、二人とも、下を向いて頭を垂れて、足並もちやんと揃ひ、同一處を見詰めながら、傍目も觸らず、ものも言はないで、北の方から刻足で來た。あの傾いて立つて居る電信柱を背後にすると、偶然立停まつて一齊に顏をあげたが、目を見合つて道を片除ける。
前途の辻の角へ、身を飜して露れた、半被、股引の、跣足で、向顱卷、まくりでに鳶口を提げたのは先刻の壯佼で。いま辻の角から飜つて出ると、横なぐれに成つて蹈直した勢疾く、黑い姿が流るゝばかり。月あかりの晝のやうな、小路を來り、恰ど二人が行んだ、電信柱の筋向ひになる源が家の蔀へまつしぐらに身を以て飛び懸つた。

三

氷を碎く音がする、突然羽目板へ二ツ三ツ默つて鳶口を打ち下した、壯佼は足場を取つて、胸を張り、得物を眞向に振被ぶりながら身を反らして、

「次郎さんだい、出直して來たんだから然う思へ。屋臺骨を、畜生、たゝツこはすから覺悟をしろ。」

まつすぐに立つて、

「狀あ見やがれ。」

ばり〳〵と打あてたのは、確に羽目板の眞中を割つた。板目に食ひ込むだ、鳶口の尖を、こぢつて兩手で後ざまに引きながら、

「えゝ！　板までが、狀あ、へばりついて手答がねえや、コン畜生！」と、憤つたやうにまた喚いた。

「何を！　獸め。」と息卷荒く、內では躍上つたけたゝましい物音で、どし〳〵と飛出しさうに聞える。

「およよ！　危いから、あれさ、醉つてるぢやないか、怪我をしちや詰らないわ、ねえ！　向不見ぢやあないか、鳶口なんか持つてるから。」

と飛縋つて押留める。若い女房の聲は、あわてて居るから高いので、いらだつてる良人より、仕懸けておびき出さうとして、じらして居る戶外の次郎が耳へ眞先に入るので。

「狀あ、いびたれ女めい、汝も若え癖に料簡の惡い奴だ。すべつため、鳶口や、鐵管が恐くツて

町內の若い者が女房になれるかい。こんな時が打つてつけだ、次郎さんがたゝきのめして、抱心地の可いやう、汝が良人のむくんだ顏を鍛へ直して遣るから、難有いと思つて、やい、源を手放して戶外へ出せえ。男の珍らしい女にや、氣の毒だから、なけなし一帳羅の良人を叩き殺してな、此寒いのに不自由をさせるやうなことあ、この如來樣遊ばさねえ。ほんの一寸身體の何處かに拔裏を拵えてやる位なものよ。はゝゝゝ、」と快げに笑つたと思ふと、また言鋭く、

「貧乏神あ其處から逃げ出さあ、やい、まだ出ねえか。え、おい、チョツ、も一ツ景氣をつけてやれ。」と更に拔いて取つた鳶口を上段から打つてあてた。

「放しねえ、放せつたら、えゝ！　あ、あんなこと、言はれて、汝なんざ、何だ。おたふく、嫣々でも何んでもねえや、嫣々なんぞ、汝、畜生、いま出るから逃げやあがるな。」と內では地蹈鞴を蹈んで憤る。

「さう來りや賴母しいや、さあ、出ろ。お手の物の鳶口樣、お待兼だ。」

「何を鼻ツ垂、汝、安穩に內へ歸つてお茶漬が食べられると思つてると間違ふぞ。えゝ！　これ放さねえか、やい放さねえか。」

「あれえ！　女房さん、女房さん、お隣の女房さん、」と取押へてるのは泣聲をあげた。

隣家の車夫の女房は、さつきの今で悉く樣子を知つて居よう。出直して來いなどと言つた、當

の敵手は自分なので、かゝりあひ免れ難しだ。
分けて入らうには鳶口が劍難だから裏口へ廻つたらしい。
直ぐ來て、源の內で其聲がする。
「まあさ、かつたいと棒打だあな。お前さんに嵌る役ぢやあないから、此方は大人しくしておいでなさいよ。まあさ、」
と當惑して、これは愚痴をいふ。
「だからお前さん、落着いておいでよ。よう落着いておいでつてばねえ。」
あとは口早に女二人がくどうも何か言ふのが聞え、男のブウ〳〵が其に交つて、一緒に奥の方へ遠退いたが、內はまた靜になつた。
若い者は憤然として開き直り、
「いよ〳〵出ねえな、可、こんな家や鳶口の尖へ引かけて葛西街道へ投げ出してやらあ、覺悟しろ。」
と滅多打をやる、この景氣では、眞個に壞すかもしれない。

四

暴れる音が打返し、打返し、また立續けに、寢靜まつた、寂として、眞蒼な、明い町を貫いて亂調に響き渡る。十間ばかり北へ隔つた同一町の辻のあたりを、兩側へ左右に開いて、兩人、月夜の明暗の中を打並び、人家の廂の下と、また溝の緣を渡つて、歩くにつれて斜形に、其背と、腹と、背と腹とを見せながら、靜かに、落着いて、足袋跣、音も立てず、然も高く地を蹈むで、鷹揚に練るが如く來た。
右なのは、乳の下から斜めに落して、鳶口の長いのを腰に横へたが、片手を懷にして、片手の肱に眞赤な線を描いた、縱に三番組と墨で入れた提灯を抱いて居る。
左なのは、少それよりも小造で、これはおなじほどの鳶口を提げて、柄を落し、頭を胸に取つて逆に持つて居る。これも片手を懷にして、いづれも鳶の裝束で身を鎧つて、頭巾を目深に被つて、口あてもしつかりした、目ばかりの其顏を、兩個ともうつむけて、近い處は目を配り、遠きあたりは耳で聞く、一寸も隙の無い身構。提灯の灯は薄く黃色を帶びて、照らさないで、其形ばかりが見える。厚子の鎧は霜を浴びたのに、凍てた月の光が射して、黑い姿を白けさした、濡れた灰のやうな色で固く冷かにキラ〳〵するのを、身肉の形に、しつくりと着こなして、浮いてあがるやうな身輕な歩調。咄嗟目を配る其瞬間、ものの音を聞定めて、また一歩に見て、一歩に聞いて、更に一歩を進めながら、刻々、町の一部分を巡見する、火の番の意氣、あたりを拂つて、

悠々と近づいた。

眞中を通つて、さつきから若い者が壞方をやつてるのを、電信柱の前に彳むで無言で見て居た彼の夫婦連の藝人は、此時小走に行過ぎたが、五六歩離れると小路の中で、三味線を抱へた方が、しなやかな腰をのして一寸立停まつたと思ふと、一歩先になつた男のあとを追ひつゝ附着いて、齊しく刻足で急いで行く。

其姿を、右なるが振返つて、舊來た方へ見返つた時、左なるが屹と前途を望むで、いま勢餘つて、よろけなりに得物を横に振つた、源が、軒下の若い者の、手と足と動いてるのを見て取つた。

兩個は言ひ合はせたやうに左右から身を寄せて、道中でひつたり肩を合はすと、雙方逆に三角の形をした、其刺縫の頭巾の中から、鋭い目と、愛くるしいぱつちりとした目とを見合はしたが、瞳を返して、再び亂暴な若い者の擧動を見て、一緒にやゝ其足をはやめた。

あばれ者が獨で景氣をつけて、ありやりやん〳〵と、懸聲で打込みながら、夢中で壞してゐるから些少も氣が附かぬ。

背後へノソリと寄つて、

「おい。」と落着いた聲を掛けたのは脊の高い方で、提灯を持つた手を組んだまゝ一指をも動かさないで然う言つた。それでも構ひつけぬからまた力を入れて、

「騷々しい、こら、巫山戯るない。」とぎつすり言ふ。

「誰だい。」

「我だ。」

「何奴だい。」

「我。」

「何だ。」

「我、我。」と言つたばかりで、澄まして横を向いて居る。若い者は躍起となつて鳶口を持直した。

「我、我、へむ、何を言つてやあがる、見損なつたか、狸穴の次郎さんだい。」

五

「可いよ、分つた、其次郎さんが何うしたんだ。」と、これは自若として言つた。

「源が屋臺骨を叩き壞す分の事よ、何も六ケ敷ことあねえ。」と活々した目を睜る。

「止しな、止しな、詰らない洒落だ。また木葉のやうな喧嘩だらう。」

「何うして叩き壞すやうな喧嘩だ。構ふない、へむ、差配さんぢやあるまいし。」と冷かに言放つて、また得物を取直すと、手甲かけた大きな掌で其腕を押へ、

「止せよ！」と言つた、が力が入つたので、若い者は掙いて放した。
「畜生手を出したな」
キッと立直つて、對手は擇ばぬ、誰でも來いで、若い者は喧嘩に饑ゑて居つたと見える。
火の番を當の敵手にして一ッ取組んで、あまり錢がないから、何處かへ怪我でもして見たいのだ。
取つて鳶口を構へると、平和な目ばかり、頭巾の裏に微笑を含み、無意識に垂れて居た、片手を上げて提灯を持つた手を袖口で組合はして、對手は平氣で居る。
「驚くな！」とばかり身悶えして、アハヤ掴みかゝらうとするトタンに、すッと寄つて同一扮裝ながら、身の細りした、小造で肩の優いのが、清い聲で、
「ちよいと。」
猶豫ふのに引冠せて、
「お前さん、又かい。」
と言尻の切れたもの言ひである。これを聞くと、あばれものは其の(あばれ)が懷中から拔け出してフイと失くなつたやうに落膽した。
で、きよと〳〵として、ぢつと見ると、——重いから横に弛んで、片目を蔽つた頭巾の緣を、

眞直に搖り直した。
瞳の清しい色の白い、くッきりした、うつくしい、眉も飜れて伺はれさうである。
「おや。」
「よく始めるのね。」といつて、一歩退つて、一つ瞬いた、其すゞしい目に微笑を含む。
「頭ン家の……」
と若いものは、も一度見直して、
「驚いた、珠ちやんだ。」
「今晩は、」と笑ひながら故と澄まし切つて、いま顏を合はせたもののやうに此小造の細りした火の番の一人は言つた。
「驚いたい、何うも、へい、串戲ぢやああありませんぜ、そして此方のは？」
と若いものは屈んで、いま一人の頭巾の中を差覗く。
「甚さんだわ。」といつた小造なのは其方を向いて、
「ねえ、甚さん。」
「今ン日ア。」と輕い調子で、あらたまつて故とらしく頭を下げた。いままで寒巖の如く、生拔いたやうに立つてたとは打つて變り、聲も甚しく碎けて聞える。

「串戯ぢやあねえ。」
「甚さんたら、作聲をして可笑くッてよ。」
「串戯ぢやあねえ。」
「次郎さんが、また大時代をいつてるぢやありませんか。源が屋臺骨を叩き壞す分の事よッてお前、鳶口を振つて木遣をうなつて居てよ、お演劇のやうで私おもしろかつたわ。」
「串戯ぢやあねえ。」
「でも、やい、手を出したなッて、お前さん、キッパリとなつて威勢が可かつたこと。」
「串戯ぢやあねえ。」
「一人で居るとまるで見違へるわ、お前さん、父上の前で、膝小僧を出して、畏つておいでの時とは別の人のやうよ、可かつたねえ、」と擽られたやうに身を搖つて、手甲かけた大きな嵩張つた掌をしつくり二個合はせたを、輕くポンと拍いた。
若いものは苦笑ひで、
「串戯ぢやあねえ。」

六

「へい、へい、御最屓に難有う存じます。いえ、恁う申しちやあ我慢のやうに聞えますが、全くでさ。番太の菓子を召食つた舌でなくッちやあ私等が鮨を食つちやあ下さりません。
何しろ屋臺店で汚うがすからな、砂だらけだとばかりで、門構の中に住まつてようといふ旦那方は、振向いても見ちやくれません。田舍ものでさ。」
と小手に腕力を入れて、拭巾をぐいと緊め、海苔を卷いて居る屋臺店の鮨屋の亭主は、片頰に笑を含んで上を向いた。
「はゝゝ、ねえ、旦那。」
「ぢや何か、割に賣れないのか。」と屋臺の陰の暗い處で、亭主が腰を休めようといふ、小さな床几に腰を懸けて、少し横顔を見せて亭主にものを言ふのは、二十八九の品の好い瘠形の男である。色の淺黑い、苦み走つた、其癖何處か鷹揚な、柔みのある、おつとりした眼鼻立のしまつた人物で、少しのびた頭髪は横撫にひつたり額を環取つて、帽子の形は印されてるが、被つては居なかつた。
亭主は二ッばかり鐵砲卷を輕く叩いて、暖簾越に霜のやうな月の大路を透かしながら、
「何まあ、何うにかやつちや居りますが、異なことはありません。何うせ分りませんからな、旦那の前でがすがカラ話せませんよ、全くでさ。私が家の鮨を食つてやらうてえ方は、かう申しち

やあ何ですが、えゝ、贅澤です、驕つてるんだ。」
「意見をいふな、だから前ならび一錢といふ處を頂くから可い。出來たら早速頂かうぜ。」
「いゝえ、價のこツちやありません。口の惡い。」
と莞爾して、俯向いて亭主は、片襷かけた襟許を扱いたが、其手で、庖丁を取つて眞中を切つて四にした。
「召あがりまし、お茶は沸いてますか。」と斜めになつて手を揉みつゝ、地に置いてある火鉢の中を屈んで見る。
品の可い客は、綿の薄いのを無造作に三枚襲ねた、兩足で跨いで、土瓶を掛けたまゝの跨火鉢をやつて居たが、甲斐々々しく裙の短い、も一ツ衣込で居るかすりの羽織から、しやツきりと手を出して、細い、小な、火箸を取つて炭をほじつて見て、
「可からう。」といつて、其手が上に出ると、仰いで一個取つたが、俯向いて火鉢の上で食べるのであらう、屋臺の蔭に姿が隱れる。
「あとは鮪にしよう。」と、やゝあつて其眉の秀でた顏が見えた。
「まだ食りますか。」
「食るよ。」といつた姿は、また屈んで見えなくなると、カサ〳〵と炭火を突く音。

其時衣ずれのするのが聞えて。
「おゝ！　寒い。
「もやがすつかり晴れましたから、恐ろしく寒じて來ました。」
「良月だ。」
「此寒いのと、馴れつこに成つてるのとで、お月樣なんざ氣がつきませんが、宛然かう海の底にでも入つてるやうな景色ですぜ、更けました。」と亭主はちよいと手さきを拭ふ。
「一時か知ら。」
「もうそんなものでございませう……」といつて默つたが、飯をならべながら見返つた。
「此大道商人といふ奴は、よく刻限を聞かれるもんですが、ねえ、旦那。」
「大きに、」とばかり、客は其顏は上げずに言ふ。

七

「演劇なんぞにも能くやりますな。大抵夜鷹蕎麥が摑りますぜ。蕎麥屋。へい。何時だらうの。四ツでもございませうか。ふウ熱くしてくんねえ、かう、天水桶の水を汲込むッて言ふが眞實か。御串戲おつしやりまし。手前のは神田上水を絹漉にいたしまする。そんなに手間が取れるのか、

道理でぬるいや。御串戯おつしやりまし。あい、と代を置く。毎度難有う存じます。と荷をかついで下手へ入りますぜ。あとは、四てんで忍と言ふのになります。皆作者がやるんださうで、故くッていけません。旦那ア鮨屋をお使ひなすつて、彌助や、何時だ、は新らしうがす。えゝ、何ですかい、矢張そんなこともお作りなさいますかい。」

「何をさ。」

「そんなものでさ。」

「何、詰らない、何のこッた。」

「だつて、何で在らつしやいますとね、其何なんぞおやんなさるんださうで、」

「お前の方が餘程作者だ。」

「いえ、おかくしなすつたつて、旦那ア黒頭巾ですな。」

「何のこッた、知らん。」といつた、客の言は嚴格であつたから、亭主は心着いたものと見える。浮いた調子に笑つて紛らかした。

「はゝゝは、黒頭巾といや、今夜外套も召しませんな。どちらのお歸りでございます。」

「宅から來たさ。」

「大分お晩く、いつも書生さんをおつかはしになつて下さいますが、お寒いのに何うも難有う存

じます。何ですかい。奥様はおあんなさりませんので？」

「無いよ。」と投げるやうに言つた。

「道理で。」

「何うした。」

「何うして、奥様が今時分お出しなさりますもんですか。」

「うまいこと知つてるな、お前は持つてるのか。」

「何、ありやしません。」

「舊から、」と口を挾んだ。

「いゝえ、ございました。濱で三階造の家を持つて遣つてました時分にやありましたが、こんなになつてから居なくなつたんでさ。出て參りましたんで。婦人てえ奴は實のあるもんですぜ。(決してお前さんが身上をすつて、其日ぐらしになつたからつて、其で出て行くのぢやございません。夜一夜大道で、お稼ぎだから、皆が寢る時分に寢られません。それぢや、女房の役目が濟みません。)ツていやがつてね、其ッ切でがす。それから旦那え、十年あまりも一人でやつてますが、面倒ッ臭え、憚りながら嫣々なんぞ持つて居て今時分までこんなことをして居られるもんですか。何うして女房なんか附いてちや、こんな心持のいゝ旨え鮨を、旦那に夜更てから食べさし

てあげますことが出來ますものか。」

意氣昂然として言つた。客は胸を正して眞直になつたが、屋臺の中へ凛とした其面が出た。

「何うも左樣だらう。此位旨いのは何處にもないから、大方、女房のない男だらうと思つて居た。」

「へい。」

「私が行く處に床屋があるんだ。いつも病身で、初中苦い顏をして居るが、名人といつて可いんだね。其代餘程折がよくないとあたつちやあくれないが、矢張ひとりものさ。お前とおんなじで、私の顏さへ見りや莞爾々々するんだ。其上手なことッたらないぜ。

「へい、何しろお氣に適つて結構でございます。床屋と鮨屋はひとりものに限りますな。」

といつて呵々と笑つた。

「何、然うとは限らない。」と客もまた微笑んだ。

八

「女も何でさ、縫のある裲襠や、友染の長襦袢で押廻してる內あ可うがすけれど、嫣々となると、一體何ですぜ、女房に不景氣はついてまはるもんですぜ。」と少い威勢のいゝことをいふ、其癖、顏がといふと、間ののびた、殊に頤の長い、目のきよとりとした、福相で、俳優某が二人袴の高

砂尉兵衞といふのに肖て、年ははや四十八九である。

「不景氣ばかりぢやない、第一お前世間ぢやあ女房といふものは家を拵へるものだといふけれどな、然うぢやあないよ、却つて破の基だ。疾い處が女房のある長屋なんざ、鳶口で壞されるわけのものだ。」と眞面目にいつた。

「何、まさか。」

「處があるさ、私ン處の近所に近い頃越して來た少い夫婦が居るが、何か植木屋の下まはりだつて、二人とも柔和いんで長屋中の譽物だつてよ、勿論なかが可いとさ。然うするとお前、今夜鳶口で以て蔀を打拔きに來た若いものが有らうぢやあないか。夜中だ、びり〳〵と硝子戶へ響くから、何だらうと思つて、月明で見ると、遣つてら！

月も良かつたし、何うするか知らんと、それから門へ出たが、一人もんだらう、あの若い奴も。何うして女房持ぢやあ木遣で打壞をやらうなんて、小氣味の可い、豪勢なことあ出來るもんぢやあない。

小陰で見てたら寒くッて堪らないので、もう入つて寢ようかと思つたが、鮨屋さんといふ、いろを思出しちや、料簡出來ないから、其まんまでぶらり〳〵來たわけだ。

「へ、何、そんなこッて、ひとりものをお賞めになるんですか。御串戲もんですぜ、私あ眞劍だ

つた。」といつて、ぎうと一ツ上下を返して握つた、鮨屋は拍子ぬけのした形で默る。
人通はちつともない。
處へ笛が聞えた、急に、短い、迫つた、節の無い調子で、高かつた、が次第低になつて音が消えた。
「御亭主。」
とやゝものいはないで居た客は呼びかけたが、亭主も耳を澄まして居たから、確にいまの笛を怪んで言ふのであると思ひ取つた。
「旦那口笛です。」
「何うも左樣らしいよ、盜賊でもつかまるのか。」
「何とも分りませんな。」
「然ういや、さつき此先であの火の番といふんだらう、鳶のものの裝束で二人兩側を歩行いて居た。すつかり身體を鎧つて、玄武、朱雀といつた將軍のやうな威勢がある。晝間は、たゞの少い者なんだらうけれど、きまつて出た處は指一本させるんぢやあない。きび〳〵した心持の可い恰好だ。女房があつちや、矢張あんな眞似は出來なからう。男だけれどほんとに惚々するよなあ、」
といひかけたが、フと其口をつぐんだ、客は屋臺のうしろに腰かけたまゝ、捻向いて通を見た。

すぐ其耳近にまた笛の音がしたのである。見ると、此店を十間とは隔たらない、此方側は塀に沿ひ、幅六間の町を挾んで、向側は屋ならびの軒下を、おし寄せるが如く、靜かに、火の番が二人で來る。
また笛が聞えたが、確に向側のものの口からと思はるゝ。但近づいたにもかゝはらず、此度は細く、幽かに、極めて短かく響いた。
が、やがて來るともなく、來らざらんとするでもないやう、自然に、悠々として、件の結束した灰色に水を浴せたやうな月下の姿は近くなつた。ト思ふと、はやくも屋臺に釣つた洋燈の灯の中に、小作で細りしたのが明るくなつて、思ひがけず目のさきへ立停まる。

九

「入らつしやいまし。」と透かさず聲を懸けて、新來の客を迎へた亭主は、吃驚して呆れた、美少年だと思つたのである。
「親方、もう晩いのね。」
と優しくいつて、新客は極めて普通に無意識に、婦女が癖として其鬢を搔上げるが如く、ふツかり被つて居た刺縫の兜を重いもののやうに背後へ脫いだ。

「おや！」といはれて、新來の客は、天心の月を背中に浴び、屋臺の洋燈に照らされた。其瓜核形の輪郭の下頤のふつくりした、紅をさしたやうな唇の可愛らしい、しまつた、鼻筋が通つて、口許との間の目立つて短い。之は、ゆつたりした、氣の長い、悠々した、甘ッたるい、押の強い、間の伸びた、六十七十まで生きようといふ田舍氣質の持たない相で。眉もキリッとした、うつくしい、はり切つたやうな清い目の、眦は切れてるけれど、まだ少いので、あどけない故で、愛嬌がある。生際のくッきりとした、濃く、艶やかに房々とする髪を、構はず白の手拭で向顱巻をして居るので、頭巾の下だから、思ふさま髪も亂れ、前髪も割れて、島田の根が横に拔けて、いまにもばら〳〵に成つてがつくりしさうだけれど、一筋もこぼれ懸らないで、すつきりした曇のない晴々しい顔が、暖簾を潛つて出ながら、嬉しさうに莞爾した。

「氣がつかなかつたのねえ。」

「誰がお前樣、はゝゝは。」と鮨屋の亭主は快げに笑つて身を反らした。頤の長い兀げ上つた額は、屋臺の屋根にかくれて、大口を開いた。

其額を下から覗いて、

「さあ、」

「えゝ。」といつた亭主は、故らに此「さあ、」なるものの何を意味するかを聞かうとする。新來の

客は促して、

「さあ、よ、親方。」といつた時、前後をちやんと見て、また振返つて背後を見た。向側の軒下に、いま一人の鳶は描かれたもののやうに佇んで居る。黄味を帶びた月夜の提灯に影も射さない。亭主は悠然と構へ、切口上で、

「珠ちやん、何でございます。」

「あれだよ、さつさと、しと、甚さんが待つてるからさ。」

「へい、お連樣がございますか、此方へ入らつしやれば可のに。」

「いゝえ、お腹の工合が惡いとさ。」

「また飲過ぎだ。」と亭主は合點した獨言。

「何うだか、」と投げたやう、珠は小手をはづした。大なのが、ぽかりと取れて、片一方腰のあたりへぶらりと下ると、皮を剝いた筍の根よりも白い、細りした手を屋臺にかけた。胸のあたり纔に淺葱の半襟が刺縫の鎧から洩れて見える。

「頭アまだ拶々しく參りませんか。」といひながら、亭主は手の利いた握早に飯を撮んだ。

「だからチョイと代に出たの。」

「何しと、お前さん故ッとでせう。とかくこんなことがお好な風だ。え、珠ちやん、またあのイ

ギリス卷にいつた、ひよろ高いお嬢様に、お轉婆だつてなぶられますぜ。お前さん、また口惜がらうと思つて、」

「可いのよ、あのお嬢様はね、情人が出來ないもんだから口惜がるんだわ。」

「へい出來ませんか。」

「あゝ、」

「何故でせうな。」

「だつて學問があるとやらだからさ。長いのに肩掛を引張つて、煩ケしい顏をして晩方になると歩行いてるわ。書籍を讀む目色だつて、嫌ぢやあないか。男の顏に字が書いてありやしまいしねえ。」

十

「變な目色だね。」

「あゝ、だからね、今井町の源さんの近所に、硝子戸の入つた二階家があるわ。」と言が途絶える。

亭主はゆつくりと口を挾んで、

「待つて下さい、何だかお話が分らなくなりましたぜ。」

珠は些少も氣がつかず、

「何故さ。」

「えゝと、最初は其お轉婆でせう。それから其お嬢様でせう。あとが肩掛で、晩方で、書籍を讀む目色で、男の顏で、だから源さんの近所に硝子戸の二階窓は、分りませんね。」

「だからさ、」とせツついて言ひかへした、珠は眞顏になつたが、思出したやうに、ぱつちりと一ツ瞬した。

「知らないよ、分つてるわ。」

「いゝえ、分りませんが一向。」とばかりけろりとして居る、トせき込んで、

「あら、左樣ぢやあないの。」……

「へい、何が左樣ぢやございません。」

「まあ、お聞きつたら、じれつたい！」と支いた手に力を入れて、口惜さうに目を睜つた。

「へい〳〵なるほど、やれ、いそがしい、」とまた働く。

「彼處はね、貴賀さんてえの、何だか、學士とやらだわ。」

「なるほど、」と頷きかけたが、亭主は小陰に先刻から故とか不知、それとも極が惡かつたか、ここに人がありと知られないやう、ひそまり返つて、ぐつと腰かけた胸を折つて、跨いだ火鉢に胸

を載せるやうに俯向いて隱れて居る、お馴染の贔屓の客は、てツきり其だと然う思つた。
氣色にも見せないで、
「なるほど、」と、あらためてモ一ツ言つて置く。
トつい釣込まれて、
「其貴賀さんにすツかり嫌はれてしまつたの。分らないねえ、其お嬢樣がさ。だから口惜がつてるんだわ。お邸は御身分が可いんだつて、あすこの竹どんが然ういつたわ、江戸ッ兒が目の敵だつて、睨むよ。華族さんは情夫が出來ないのかねえ。」
「ぢや、お前さんは出來るでせう。
莞爾して、
「お生憎よ。」とあどけなく小さな聲でちやんと言つた。
「其代り、此方は、さあ、出來ました。」と、うつくしく鮨を並べる。
默つて見て居て、珠は露ならでは觸れさうもない、白い、細い、節の立たない指を出して、動くと、おあつらへに手が懸る。
「姉さん、お湯をあげませう。」
と此時聲がして、屋臺の灯の屆かない隈に、床几に腰懸けたまゝの、今珠の口から言ひ聞えた、

源が近所の二階家の硝子窓が住家である、其の貴賀文學士は、寢衣で潛出の胸から上を屋臺から見せて、かすりの綿入羽織と三枚重ねで揃つた八丈の袖口から、無雜作にずッと手を出したが、湯呑に番茶を汲んであつた。
口からむら〳〵と立つ白い湯氣は渦いて、屋臺店の片隅に束ねてある眞蒼な根笹を掠めて、この寒月の大路の屋根の下に、さも暖かさうに蔽ひかゝると、冷い風が横なぐりに珠が赤らめた顏に靡いた。
文學士は思ふことの無い打あけた音調で、
「御遠慮には及びません。」
「はい、」とかすかに會釋する、珠の聲はふるへたが、立直つておつと見て、
「難有う存じます。」とはッきりといふ、トいま取つたまゝの鮨を一個、後へ祕して竊と棄てた。

十一

其まゝ中指のさきの節に、萌黃と、桃色と、紫と、赤と、白と、鳶色とで、きれいに綾をかけた裁縫用の指環を嵌めてるのを、臆せずソと出して、そして貴賀の手から、湯氣の今淡くなつた茶碗を取つた。

「おい、まだなんかい。」
と、のッそりと來て、背後で言つて、向側だつた恰幅の可い鳶の者は、待兼ねたのである。
珠はハッとしたやうすで、手にしつかり持つた茶碗が揺れたが、横に立直つて斜めに顏をあげた。事ありげに見えるおもゝちながら、微笑んで、
「今よ。」と、一言いつたばかりである。
「親方、早くしてあげなせえ。」
「へい、」といつたが、何か不知、場が白けて、其處等工合が惡かつた。
「齒が痛いんでね。」
珠は活きた人形のやうな顏を傾けて、片々はまだはづさなかつた、刺縫の小手のふッくりしたので頰を支へる。
「だからお止なさいッてッたんだ。蟲齒だから左樣でなくッてせえ痛むのに、鮨の立食は亂暴だ。なあ、親方。」
鳶の者は苦笑する。これは顏を知つた甚三であるから、鮨屋は事もなげに笑つて、
「何んなものでせうか。何しろ、手前あきなひます品物ですから、はゝはゝゝゝ。」
「む、そりや左樣だ。だが珠ちやん。」

「あら、私は食べやしないわ。」
「これから、やるのかね。」
「もう止しました、おゝ痛い。」と眉を顰める。
「頭巾を取つたから冷えたんだ。もう歸るんだから、我慢なさい。そして、其うがひをすると可いやね。え、うがひを。」
と勸められて、珠は何故か猶豫つたのである。
「熱かないんでせう、がぶりと、え、がぶりとお遣んなさいな。」
「だつて、」
「よくならあ、口をすゝぐと紛れらあ。そして意地汚は止して歸りませう。」
「だつて、」と珠は困じたやうだ。鳶の者は氣が着かないから、
「ね、やつて御覽なさい、きつと可いんだ。」
「あの……だつて、」
「いゝえさ。」
茶は、こひしい學士が汲んで吳れたのであるから、
「私、御免よ、お前、」

「何もこれにあやまるて奴あねえ、なあ、親方。」
「然ればさ。」
「よう、珠ちゃん。」
「御免なさいよ。」
「あら、御免なさいッて言はあ。」
「だからさ。」
珠はせん方なげに、打まもられつゝ、茶を含んだ。
文學士はぢつと見た。鳶の者は引添うて、
「が、がッとやつてお出しなさい。あゝ飲んぢやつた。串戲ぢやあねえ！」
珠はあでやかに微笑んで、
「御免なさいよ。」
二人は並んで屋臺を出た。暖簾の外で、珠はまた頭巾を着たが、今度は左右に開かないで、鳶裝束の二個の後姿は、姿をひとつにして身體を合せた。恰ど、さつき夫婦の藝人が並んだやう。
月あかりに形は薄くなつた、が影を冴かに地に宿して、次第に町中を遠ざかる。鳶口の柄の影も見えた。

其時鮨屋の亭主は、うつかりして居た文學士を見返つて、顏を合せた。
「旦那、」
「怪しからん、」といつて、眞顏の構を破して。カラ〳〵と笑つた。
微かに笛が聞える。
また口笛を鳴らした。
男が口笛を留めると、女は俯向いて歩行いて居た顏をあげた。
「ちよいと、威勢が惡いなんて云つてないで、早く私を女房にしておしまひよ。」
「え。」
「然うでないと、私、氣が變るもの、岡惚が出來たもの。」

東京府規格外許可已資紙規第一七三號

昭和十六年十二月二十日　印刷
昭和十六年十二月二十五日　發行

鏡花全集　第三卷
會費　貳圓六拾錢（停）

著作者　泉（いづみ）　鏡（きやう）　太（た）　郎（らう）
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

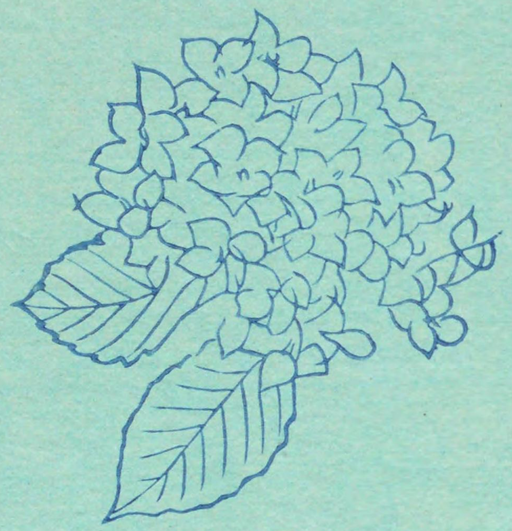
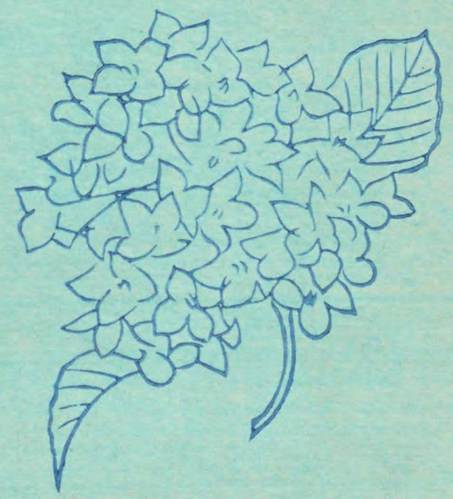
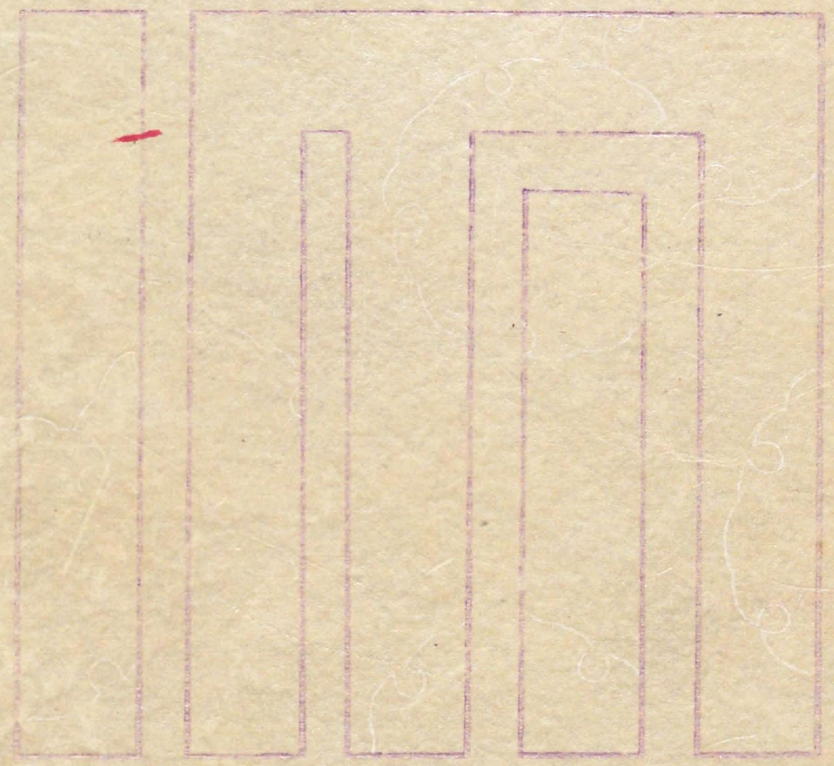
發行者　岩　波　茂　雄
東京市下谷區二長町一番地

印刷者　井　上　源　之　丞
東京市下谷區二長町一番地

印刷所　凸版印刷株式會社
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所　岩　波　書　店
電話九段（33）一八七番（4）
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（大森製本）

落丁・亂丁等不完全な品があるしまりたら直接お申出下さい　お取替致すまし